

「限定詞＋名詞」より成る句の 意味強勢と音調について

山 内 不 二 吉

ま え が き

私は本誌第三号で、「地方なまりの日本語と日本なまりの英語」と題して、日本語と英語における音声の差異を論じ、その中の「音調」の項で次のように述べた。

『……そして、これ（意味強勢）によつて、an English teacher が「英国人の先生」か「英語の先生」かを区別し、a black bird と、a blackbird を、a sleeping baby と a sleeping car の sleeping の意味を（もちろん耳で聞くだけで）区別する。』

この一節で私がいつた意味強勢による区別というのは、要するに、ある句（または複合語）の持つ意味強勢の型が平板強勢・非平板強勢のどちらであるかを知つていて、その句（または複合語）を耳で聞いた場合にその意味を正しく理解し、目で見ただけの場合にはそれを正しく発音することである。

上に引用したような句と複合語、すなわち「限定詞＋名詞」の形を持つ名詞句と複合名詞には、①平板強勢を持つもの、②非平板強勢を持つもの、③平板・非平板の二つの型を合せ持ち、話者の表わそうとする意味によつてその何れかが用いられるもの、④強勢の型が一定せず、話者の習慣によつて平板・非平板の何れにも発音されるもの——の四種がある。たとえば、black bird と Sleeping baby は①に属し、blackbird と sleeping car は②に、English teacher は③に、また oak tree と headquarters は④に属する。そして、これらの語句の音調はその強勢の型に従うものであるから、（型としては平板・非平板の二種に大別出来るが）、音調によつても語句を強勢による場合と全く同様な四種に分類出来るわけである。

さてこの種の語句がすべて上記の④に属しておれば、英語を主として目を通じて学ぶ我々日本人には非常に都合なのであるが、不幸にして①②③のどれかに属するほうが普通である。したがつて、次のような句を平板・非平板のどちらで発音すべきかに迷うことが多い。

gold watch, wrist watch; ice cream, vanishing cream; city hall, music

hall; private school, high school, Sunday school; brick building, body building, Physics Building, Chrysler Building; Fifth Avenue, Fifth Street; apple pie, apple tree; head gate, head master, head money, head office; flying saucer, flying machine.

ある句の持つ意味強勢の型は、その句の表わす意味とその句の形の関係（言いかえれば、その句の限定詞の品詞が何で、どんな意味に用いられているか、次に来る名詞をどのように修飾しているか、また句の意味は名詞句的か複合名詞的か）によつて定まることが多い。しかし、句の意味強勢対句の形と意味の関係は微妙であつて一定せず、慣用法によるという以外に説明のつかない場合も多い。したがつて、少数の句に見出いだされる共通点を、他の多くの類似した句に当てはめると、誤りを冒しやすい。しかしそれだけに研究しがいがあると私は思う。以下本稿に述べることは、私が耳を通じて得た実例を基として、上記の共通点をまとめたものである。

本論に入る前に一応断つておきたいことは、我々日本人の誤りやすい問題を主として論じたいため、題材を次のように限定したことである。

- (1) 句は「限定詞＋名詞（主要語）」の二要素によつて構成される名詞句または複合名詞であること。
- (2) 句は限定詞と名詞の二語より成り、合せて二音節または三音節となる短かいものを主とすること。
- (3) 「限定詞＋名詞」とは、「形容詞（または形容詞相当語）＋名詞（または名詞相当語）」を意味すること。
- (4) 限定詞の種類を、主として形容詞・名詞・現在分詞・動名詞の四種とすること。
- (5) 句の意味強勢と音調は、句が独立している場合または平叙文の文尾にある場合に用いられるもの、すなわち（特に附記しない限り）その句が本来持つ自然なものをいうのであつて、喜怒哀楽などの感情・他の語との対照などを表現するために臨時的に変化したものでなく、また疑問文の文尾その他の場合に用いられる上昇調を持つたものでないこと。

I 平板強勢と非平板強勢

一般的に言えば、平板強勢は「形容詞＋名詞」よりなる句に用いられる型で、非平板強勢は複合名詞に用いられる型である。先づその説明をしよう。

二つの語から成るある句が平板強勢（level stress または even stress）を持つているということは、その二つの語が殆んど同じ程度の強勢（しかし普通には後の語の強勢の方が僅かに強い）で発音されることを意味する。平板強勢は 'stand 'up, 'break 'down のような動詞句や 'light-year, 'well-known,

'cold-blooded のような複合語にも見られるが、それはその構成要素がどちらも意味強勢を持つ品詞であるからである。したがって、「限定詞＋名詞」の名詞句が次の例のように平板強勢を持つことは当然である。

'fine 'day, 'three 'girls, 'many 'people, 'gold 'watch, 'head 'office, 'King 'George, 'John 'Brown, 'Mrs. 'Brown, 'Fifth 'Avenue, 'retired 'officer, 'crying 'baby, 'Henry's 'uncle.

上に述べた場合と異り、一つの語が他の語よりも著しく強い強勢を持つ場合には、その強勢の型を非平板強勢 (uneven stress) といい、強い方の強勢を第一強勢 (primary stress)、弱い方を第二強勢 (secondary stress) という。

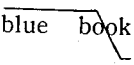
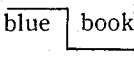
非平板強勢には、第一強勢が前の語にあつて第二強勢が後の語にある型とその逆の型の二種があつて、複合語においてはこれで名詞と動詞を区別する。すなわち、(多少の例外はあるが) 一般に第一の型は名詞に、第二の型は動詞に用いられる。しかし、「限定詞＋名詞」で構成される名詞句の場合には、第二の型は平板強勢とは対照的でないので、本稿では仮に第一の型だけを指して非平板強勢と称することにする。というのは、前にも述べたように、句の普通の強勢の型である平板強勢では、元来前の語 (限定詞) の強勢の方が幾分弱いのであるから、その弱い第一強勢が更に幾分弱まつて (非平板強勢の第二の型のように) 第二強勢の程度に成ることは珍らしいことではないからである。大まかに言つて、平板強勢と非平板強勢 (第一の型) は対照的なものであつて、後の語 (名詞) の強勢が強い型が平板で、前の語 (限定詞) の強勢が強いのが非平板だと考えておけばいいのである。

非平板強勢の例は句に少く複合語に多い。次の例のように限定詞に第一強勢を持つ句は、実は句のように二つの語に分けて書く複合名詞であるか、または複合名詞的な意味を持つ名詞句である。このようにあいまいな言い方をするのは、句と複合語の境界が明白でないことと、それに関連して、複合語の書き表わし方が一定していないこと (例, coast line, coast-line, coastline) による。しかし、それより更に大きな理由は、平板強勢と非平板強勢が句と複合語を区別する絶対的な規準ではないことである。すなわち、この二種の強勢は、それぞれ句と複合語に多く見られるものではあるが、それぞれあらゆる句、あらゆる複合語に共通する強勢ではないのである。

'White 'House, 'blue 'book, 'Tenth 'Street, 'Sunday 'school, 'Physics 'Building, 'grammar 'teacher, 'glamour 'girl, 'swimming 'team, 'conning 'tower, 'music 'hall, 'musk 'melon ('musk,melon), 'business 'man ('business,man), 'weather 'station, 'weather-strip, 'weather,cock, 'black-berry, 'blue,bird, 'high,way, 'low,boy, 'sea,port, 'class,mate, 'sun,rise.

II 意味強勢と音調の関係

上に述べた二種の意味強勢は音調 (intonation) と非常に密接な関係を持っていて、句の強勢の平板・非平板の差異は句の音調に明瞭にあらわれる。この強勢対音調の関係を、二種の意味強勢を持つ blue book という句を例にとつて示すと、次のようになる。

	(A)	(B)
強勢	'blue 'book	'blue ,book
音調 (1)	blue book 	blue book 
(2)	blue book 2— 2—4	blue book 2— —4

(A)は平板強勢で発音する場合であつて、blue の母音と book の母音が同じ強さで発音されるが、音調も強勢に従つて平板となり、両母音の声の高さは同じであることを示している。もつとも、book の母音の後半は低くなつていますが、これは言葉の終りに用いる、英語に普通な音調の型を示すものである。この語尾の下降調の部分を除けば、強勢のある二つの母音の高さは同じでその音調は平板であるから、この「高一高低」の型の音調を、本稿では仮に「平板調」と呼ぶことにする。

なお、平板強勢において前の語の強勢が後の語の強勢より幾分弱く、時には更に弱まつて第二強勢とも成るように、平板調といつても、前の語の声のピッチは後の語よりも幾分低いのが普通である。そして、前の語を軽く発音する(すなわち前の語の強勢が弱まる)場合には、その「高」の調子は「中」に下ることもあるし、また時には「低」にまで下ることさえ有り得るのである。これを(例)の(2)のようにピッチを番号で表わせば、2—2—4 は 3—2—4 にも 4—2—4 にも成ることがあるということである。

上の(B)は同じ句を非平板強勢で発音した場合である。音調は「高一低」で、第一強勢を持つ blue の声のピッチが高く、第二強勢の book が低い。この「高一低」の音調を、本稿では便宜上「非平板調」と呼ぶことにする。

ここで音調の表示法について簡単に説明しておきたい。上の例に用いたものは、どちらもアメリカの音声学学者 Kenneth L. Pike がその著書 The Intonation of American English に用いたものであつて、話す場合の声の音域内で最高・高・中・低の四つのピッチを定め、これを文字に対する横線の位置により、または最高から順に 1, 2, 3, 4 の番号によつて表わす方法である。(1)の方法は印刷するには不便であるが、わかりやすいので、近頃我が国でも用いられている。しかし著者も認めているように、あるピッチと次のピッチの中

間の音が表わされないで、どの音節もどれかのピッチにはつきり属している感じを与えるのが欠点である。blue book の非平板調も、実際は(1)に直線で表わしてあるように簡単なものではない。

(1)の横の線が表わす高と低の二つのピッチは、厳密に言えば(2)のピッチ番号が示すように、単にこの句の始めと終りのピッチを表わしているに過ぎない。声は既に blue の後半で下り始めるし、book は相当低いピッチで始まるが、声が下りきるのは最後の子音 k の始まる時である。したがって、実際のピッチの変化は曲線的であることを知っておくべきである。この句は僅かに二音節であるから、(1)の表示法でも間に合うが、もつと音節の多い句、たとえば telephone number とか charity association などでは、ピッチの変化が複雑であるし、その変化も人により場合によつて様でない。したがって、直線で表わしてある音調と曲線的な実際の音調との隔りが大きいし、可能な音調の型の全部を表わすわけにはいかない。だから、要所のピッチだけを示して残りを暗示する(2)の表示法の方が、むしろ正確であると言えよう。それはともかく、ここで大切なことは、第一強勢を持つ音節が第二強勢の音節よりも普通高いピッチで発音されること——それが非平板強勢に伴う非平板調の特色であるということである。

この非平板調は、一語として綴る複合語、たとえば blackboard や cupboard にも用いられる。cupboard [ˈkʌbərd] は、第二音節に第二強勢が無く、その母音は「あいまい母音」(obscure vowel)である——すなわち、綴りだけでなく発音からいつでも完全に一語の感じを与える複合語である。この語のように強勢が第一音節だけにある場合には、音調の持つ役目は重要でなく、第二音調を第一音節と同じピッチか、あるいはそれより一層高いピッチで発音しても、語の意味は誤りなく伝えることが出来る。

これに反し、第二音節に第二強勢があつて「あいまい母音」の無い blackboard や(B)の blue book の場合には、Kenyon* が述べているように、強勢という感じを与えるものの主体は実は声の高さであつて、声の強さはむしろ従である。ということは、「たとえ声は弱くても、そのピッチが高ければ強いアクセントの感じを与え、反対に、声が前よりは強くても、ピッチが低くなればアクセントが弱まつたという感じを与える」ということなのである。したがつ

* "A change of pitch nearly always accompanies a change in force;..... In some cases, moreover, the effect of accent can be got without force by management of pitch."——J. S. Kenyon (Webster's New International Dictionary, Second Edition. Pronunciation, § 62.)

「声の強さが変れば大抵の場合声のピッチも変る。……その上ある場合には、ピッチを加減して、強さをういないでアクセントの感じを出すことが出来る。」

て、blue book の持つ二つの異なつた意味や、blackboard と black board を区別する強勢の差異（平板強勢と非平板強勢）は、実は音調の差異（すなわち本稿で仮に名付けた平板調と非平板調）にはほかならないと言える。（もつともこれは本稿の「まえがき」で述べたように、強勢と音調が限定された場合にのみ言えることである。したがつて、Palmer の称する tail や Pike の称する Postcontour などのように、音調が平板であるか平板に近くなる場合には、意味の区別を示すものは強勢であると言わねばならない。）

これを言いかえると、元来声の強さを主体とし、「強さアクセント」(stress accent) と呼ばれる英語のアクセントが、この場合には日本語のアクセントと同じように、声の高さによつて表わす「高さアクセント」(Pitch accent) に非常に近い性質を持つたものに成つてることなのである。これがために、我々日本人が本稿で採りあげたような句や複合語を発音する場合には、元来性質の異なつた英語と日本語のアクセントを同一視しがちである。したがつて、

（本誌第三号の拙文で述べたように、子音の後に余計な母音を加え、音節の数をふやして発音する傾向と相俟つて）非平板の強勢と音調を持つ語句を、下の例のように、日本語に多い平板調で発音することになりやすい。またこれと逆に、この傾向を意識して行き過ぎるためか、それとも複合名詞の音調に影響されるためか、次の例のⅡのように、（限定詞を強調する気持も必要もない場合には平板であるべき句を）非平板に発音する傾向も見られる。この音調の誤は、例にあげたように音節数の少い語句の場合に起ることが多い。それは、平板調と非平板調を耳で聞いて感じる差異が、多音節の句の場合には小さいが、単音節の語二つで出来た二音節の語句の場合には最大で対照が甚だしく、また強勢と音調の関係、およびこれと意味の関係も最も密接であるからである。本稿で音節の少い語句を採り上げたのはこのためである。

I. (a) 'summer,time (正) summer¹time

(誤) サマニタイム (誤) summertime (比較) シダレヤナギ

(b) 'Third Street (正) Third Street

(誤) ニード ストリート (誤) Third Street (比較) オショニガツキブシ

II. It was a 'fine 'day. (正) fine day (誤) fine day

Once there was a 'rich 'man. (正) rich man (誤) rich man

III. 強勢・音調と語句の意味との関係

以上述べた二種の意味強勢およびこれに従う二種の音調が、語句の意味とどんな関係を持ち、どのように用いられるかということについて考えてみよう。

その例として、前にあげた blue book についてこの関係を調べることにする。

(A)の 'blue 'book は、「青い」という形容詞と「本」という名詞が並んで、「青い本」(すなわち「青い表紙の付いた本」)を意味する名詞句である。この句の強勢と音調が平板であることは、元来意味強勢を持つ形容詞と名詞が、正常な対等の関係において結びついていることを示すものである。この関係を式で表わすと、 $a \times b = ab$ となる。この式において、 $a \times$ は「青い」という形容詞を表わす。形容詞は次に来る名詞の表わす概念を限定するものであるから、この a はもちろん真分数の性質を持った数である。答(句の意味)の ab は、式によって容易に推察せられるものであつて、式に現われていない特別な数(意味)を含んではいない。

(B)の 'blue book においては、句の主要語として第一強勢を持つべき名詞の強勢が、抑制されて第二強勢となつている。また限定詞は普通この主要語に従属しこれを修飾するものであるので、これより普通には多少弱い強勢を持つ筈であるが、この場合には反対にこれより遙かに強い第一強勢を持つている。それは限定詞が特に強調された型であつて、また句が複合名詞的な一つのまとまつた特殊の意味を持つこと、すなわち意味上一つの語であることを示す強勢の型である。したがつてこの非平板強勢は、前にも述べたように複合名詞に多く用いられるものであるが、この blue book はこの強勢を示すために bluebook と一語に綴ることもあるので、複合名詞であると断定出来る。

この複合名詞には次のように三つの意味があるが、私には二十数年前の college life を思い起こさせる第一の意味が真つ先に頭に浮んで来る。

① (米) 試験の答案用紙で、本のように綴つたもの。普通青い表紙付き。

② (米、俗) 社会的有名人の名簿。

③ 英国の議会その他官庁の報告書で青い表紙付き。

この三つの意味を考えてみると、①と③は明らかにその形と表紙の色によるものであるが、厳密に言えば本ではない。また②は本に似たものではあるが、表紙は青いとは定つていない。blue という語は、おそらく貴族や知識階級を表わすものであろう。とにかく、これら三つは仮に青い本と言えとしても、単なる青い本ではなく、極めて限られた種類の青い本である。したがつて、強調された形容詞を a_1 として、この複合名詞を $a_1 \times b$ と表わしても、その答は $a_1 b$ では表わすことの出来ない $\frac{ab}{x}$ のような非常に小さい数であつて、計算では得

ることの出来ないものである。

このように、「限定詞＋名詞」の句が、二つの品詞だけでは表わし得ない特殊な意味を表わす場合には、その句は複合名詞であつて、これを音声によつて表わすものが非平板強勢と非平板調である。しかし複合名詞を名詞句と区別することだけが非平板型の役目の総てではない。非平板で発音される強勢の中には、名詞句と複合名詞の何れともつかない意味を持つものがあるし、また平板型についても同様のことが言える。したがつて強勢と音調の二つの型の用法については、次のように考へべきである。

1. 限定詞と名詞の結合による句には、①平板型を持つもの、②非平板型を持つもの、③平板・非平板の二つの型を持ち、意味によつて何れかが用いられるもの、④型が一定せず、何れにも発音されるもの、の四種がある。（「まえがき」参照）

2. 句が二つの品詞の各々の意味によつて明らかに表わし得る（名詞句的）意味と、表わし得ない特殊の（複合名詞的）意味を併有する場合に、平板型によつて前者を、非平板型によつて後者を示す。（句は四種の中の③に属し、名詞句と複合名詞の区別はこの用法による。）

3. 句が大別して二つの異なつた意味（名詞句的・複合名詞的のうちに差異の大きいものではないが、区別する必要があるもの）を持つ場合に、平板型と非平板型を用いて区別する。（句は同じく③に属するものである。）

4. 句の持つ意味が大まかにいつて一つある場合。またいくつかあつても、その意味が何れも同種類（すなわち名詞句的、複合名詞的、またはその何れともつかないもの）であつて意味に大差なく、音声によつて区別する必要のない場合に、その意味の種類によつて平板・非平板の何れかを常用する。（句は①か②に属する。）

5. 3の句と殆んど同様であるが、その意味が名詞句的と複合名詞的の間である場合には、平板・非平板の何れも用いる。（④に属する。）

6. 強勢と音調は限定詞の品詞と次のような関係がある。すなわち、句の中の限定詞の機能によつて形容詞的・名詞的の二つに大別すると、前者を含む句は平板型、後者を含む句は非平板型を持つということが出来る。

A. （平板型）

- a. 形容詞。
- b. 名詞（形容詞として用いられたもの）。
- c. 現在分詞および過去分詞。

B. （非平板型）

- a. 形容詞（複合名詞の第一構成要素）。
- b. 名詞（①複合名詞の第一構成要素。②主要句の名詞が動詞的な意味を

含む場合に、その動詞の目的語のような役割を持つもの)。

c. 動名詞。(動詞状名詞および名詞を含む)。

この最後の第六項(限定詞の品詞による平板・非平板の区別法)を、他の五項に適用することによつて、主として本稿に既に現われた種々の語句について次に説明しよう。

1. 第六項を見ると、限定詞の品詞によつて句の強勢と音調の型が確実にわかるのは、限定詞がA. c. かB. c., すなわち分詞か動名詞の場合だけである。現在分詞と動名詞は形が同一であるので、共通の主要語(名詞)を持つ二つの句の区別は、綴りに差異がない場合(動名詞と名詞が hyphen で繋いでない場合)には、文脈による以外には識別の方法がない。これを発音で区別することは、上の用法第三項に該当する。この区別に用いる強勢と音調の型は、音声学や文法に関する書物にしばしば解説されているが、それにも拘らず区別を誤める人が多い。しかし、句の意味がわかれば限定詞の品詞もわかり、したがつて強勢と音調の型もわかるわけであるから、これほど簡単な区別はない。

なお限定詞が現在分詞か動名詞であつても、句の意味は二種類あるとは考えられない場合に、どちらの型で発音するかということは、用法第四項に該当する。第三項と第四項の場合を一緒にして、この区別の例を次に述べる。(aは限定詞が現在分詞で、句は平板型。bは限定詞が動名詞で、句は非平板型。音調の表記は省略する。)

- (1) a. 'swimming 'teacher 「泳いでいる先生」。
b. 'swimming ,teacher 「水泳の教師」。
- (2) a. 'moving 'van 「動いている大荷車、貨車など」。
b. 'moving ,van 「引つ越しの荷物を運ぶための大型トラック」で、専門業者が所有している。
- (3) a. 'sleeping 'baby 「眠つている赤ん坊」。
b. 'sleeping ,car 「寝台車」。
- (4) a. 'flying 'saucer 「飛ぶ(または飛んでいる)皿」, すなわち「空飛ぶ円盤」。
b. 'flying ,machine 「飛行機」。
- (5) a. 'growing 'children 「育つ(または育ちつゝある)子供」。
b. 'growing ,pains 「育つための痛み」, すなわち「成長期神経痛」。

この用法の例をあげれば限りがない。要するに、強勢と音調の型を誤らぬことが大切であつて、これを誤まると次のように nonsense になる。

'swimming 'pool=「泳いでいるプール」(水泳プール)。
'flying ,fish=「飛行用の魚」(とびうお)。
'walking 'stick=「歩いている杖」(ステッキ)。
'smoking 'jacket=「煙を出している上着」(喫煙服)。

「変な意味になるから、まさかそうとは誤解されないだろう」という理屈も成りたつわけであるが、異様な感じを与えることは事実であるから間違えないに越したことはない。

限定詞が形容詞か名詞である場合には、第六項によつても知れるように、品詞による平板・非平板の区別は上記の1のように簡易には行かない。この場合の区別は限定詞の品詞にはあまり関係がなく、句の意味によるのである。

2. 句の意味が名詞句的か複合名詞的かによつて強勢と音調の型が決定されるもの——これは前記の用法第二項に該当するものである。これについては blue book を例にとつて既に述べた通りであるので、簡単に述べることにする。

(a は名詞句で平板型、b は複合名詞で非平板型。限定詞は何れも形容詞。)

- (1) a. 'white 'house 「白い家」。
- b. 'White House 「米国大統領官舎」。
- (2) a. 'black 'board 「黒い板」。
- b. 'black,board 「黒板・ボード」。

「形容詞＋名詞」の複合名詞は非平板型の強勢と音調を持つのが普通であつて、これを示すために一語に結合して綴ることが多い。したがつて(2)の種類に属する名詞句と複合名詞の例は black bird, blackbird; high hat, high-hat などのように多数あるが、型の区別が容易であるので省略する。

名詞を限定詞とする複合名詞も多数あるが、音節数の少ないものは一語として綴り、非平板型で発音するのが普通であり、したがつて本語の対象とはならない。句のように二語に分けて書く複合名詞は、その意味から言えば名詞句との区別が付きかねるものが多い。(第五項参照)。一つの句が二つの異なつた意味を持つて対照的である場合は、その中の一つの意味における句の限定詞は、名詞よりもむしろ形容詞というべきである。これは前記の第四項に該当する場合であつて、これを次に述べる。

3. 限定詞が形容詞または名詞であるもの。

A. 限定詞の機能が形容詞的ならば平板型、名詞的ならば非平板型を持つもの。これは1で述べた現在分詞対動名詞の区別と同様である。(a は平板型、b は非平板型)。

- (1) a. 'head (-) 'master 「校長」。'head 'office 「本店、本社」。
- b. 'head ,tone ('head ,voice) 「頭から出す声、頭声」。'head ,money 「犯人など逮捕の人数によつて与える賞金、人頭税」。'head-,hunter 首狩り蛮人」。

head が形容詞的で top, chief 「かしら、長」を意味すれば平板型、文字通り「頭」ならば非平板型を持つ。複合名詞として一語に綴るものには、この区別がなく一様に非平板となる。head-hunter を平板で発音すると、「狩人

の長」という感じになる。この語の場合に、head は hunt の目的物である。
第六項の B.b. ②参照。

(2) a. 'glass 'case 「ガラス製の箱」

b. 'glass ,case 「コップを入れる箱」。

(a の glass は名詞が形容詞として用いられたものである。限定詞がこのように原料・材料を表わす場合には、句は平板型を持つ。stone wall, gold watch, brick building などはその例である。b の glass は名詞で、あとに来る名詞(主要語)が「～(のための、～を何々するための)もの、すること」を意味し、限定詞がその～に当る場合には、句は非平板型である。story (-) teller, alarm clock, cement machine, canoe paddle, body building などはみなその例である。

(3) a. 'apple 'pie 「アップルパイ」。

b. 'apple ,tree 「りんごの木」。

前の(2)と同様に、apple は a では原料・材料、b では「りんご(を実らせて採るため)の木」で名詞である。木が果樹の場合はみなこれと同様に非平板型を持つ。これを平板で発音すると「りんごで作られた木」の意味に採れて変である。材木を採るための木、たとえば oak tree, pine tree などは平板にも非平板にも発音される。それは oak や pine などの語だけで既に「～の木、～材」という意味を持つていて、強勢や音調の型によつて句の意味の混同を来たすおそれがないからである。

B. 慣用法およびその他説明し難い理由によつて、非平板で発音される句は非常に多い。本句ではこれをくわしく論ずる考えであつたが、既に紙数が超過しているので、残念ながら二つ三つ例をあげるだけに止める。

(1) 'Pine ,Street と 'Fifth 'Avenue

どちらも街の名であつて、異なつた限定詞の例はいくちもあるが、強勢・音調との関係はみな同じである。この場合に二つの異なつた型が用いられる理由は、street のほうが avenue よりも一般的な句であり、その上一音節の語であつて、複合名詞のように非平板で発音しやすいという事実にある。ただし 'Main ,Street (特定の街路を意味する固有名詞)に対する 'main 'street (「主要な街路」を意味する普通名詞の句)のあることは当然である。

(2) a. 'English 'teacher 「英国人の教師」

b. 'English ,teacher 「英語教師」

これはむしろ上のAの(2)に属すべき例というべきかも知れない。a の English は明らかに形容詞であるが、b のは形容詞として用いられた名詞で「英語(を教える、のための、に関する)」を意味する。このbの意味(学科の一種)で用いられた限定詞を持つ句はみな非平板で発音される。'law ,school,

'French ,class, 'Physics ,Building などみなその例である。

(3) 'high ,school 「中等学校」

high が普通の意味、すなわち「高さの高い、高い場所にある」を表わす場合は、句は平板である。この場合に「高い」のは建物や場所ではなくて学課の程度であつて、この意味の差異を示すために非平板を用いるものと考えられる。(「複合名詞だから非平板を使うのである」とももちろん言える。)旧制中学校の 'middle ,school も同様であつて、これを平板で発音すれば「二つの学校の間に建っている学校」の意味にとれる。限定詞が名詞の場合も非平板で発音すべきで、grammar school, grade school, Sunday school などみなその例である。

名詞を限定詞とする句の強勢・音調と句の意味については、述べるべきことがまだ多いが、それは他の機会に譲り、本稿は一応これで終ることとする。

(本学教授)